

# 解析プログラム開発

## 途上国など 医療安全へ 技術、自由に活用を

### 世界学会で受賞

人が選ばれるもので、日本での受賞は多くな初となる。初となる。東北地方でも、弘前大学からは初

点滴治療中の患者の

## 点滴混入の血液検査で弘大・野坂講師らチーム

弘前大学大学院保健学研究科の野坂大喜講師が研究代表者を務める研究が、9月にイタリヤ・フィレンツェ市で開かれた世界医学検査学会で米国医学検査学会賞（ASCLS賞）を受賞した。患者の血液に点滴の溶液が混入し、血液の検査データに及ぼす変化を解析するソフトウェアプログラムを開発したもので、医療現場での軽微なミス（医療インシデント）の防止につながると期待される。（下山和枝）

世界医学検査学会は、の代表的国際学会で、2年に1回開催され今年で33回目。ASCLS賞は優秀発表者3



世界医学検査学会でASCLS賞を受賞した研究の代表を務める野坂講師

血液を採取して検査する際、点滴の溶液が検査用血液に混入してデータに影響する場合があります。大きなトラブルに至らないものの、見逃す場合も少なくないとして、検知方法の確立が求められていた。野坂講師の研究チームは4年がかりで取り組み、点滴を入れることで血液内のさまざまな数値がどのように変化するか明らかにした上で、一定の傾向をソフトウェアプログラムにまとめた。これについては特許は出願しておらず、自由に活用することが可能。

野坂講師は「一般的な研究開発はいかに産業運用するかがポイントになるが、医療安全の分野から見た場合は、いかに安全安心な医療を提供できるかがポイント。発展途上国を含め、このような技術を自由に使うてもらえたら」と話す。

受賞については「米国では実際に利用できる技術が重要視されており、臨場的な場所です使える技術だと評価された」と思っている。日本、米国、発展途上国などで起きている医療インシデントの防止に役立てば」と活用を期待を寄せた。

この画像は当該ページに限り陸奥新報の記事利用を許諾したものです。転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。